様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３７１１３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２００８７

研究課題名（和文）伊波普猷の「沖縄学」の可能性――近代日本のナショナリズムを攪乱する思想

研究課題名（英文）The Potential of Ifa Fuyu's "Okinawagaku" ---- the Thought Subverting Nationalism in Modern Japan

研究代表者
三笘　利幸（MItoma, Toshiyuki）

九州国際大学・経済学部・准教授

研究者番号：６０４１２６１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,700,000円、（間接経費）　810,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、伊波普猷の日琉同祖論に注目しながら、彼の展開した「沖縄学」が近代日本のナショナリズムを攪乱する思想であることをあきらかにして、その思想の可能性を模索したものである。既存の研究で同化主義とされることの多かった伊波の「日琉同祖論」は、むしろその矛盾したあり方から、近代日本のナショナリズムを内側から割り崩す可能性を持つ思想であったのである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to show the potential of Ifa Fuyu's "Okinawa-gaku" which subverts nationalism in modern Japan. Ifa's "Nichiryu-dosoron", which means that the Japanese and the Okinawans share a common ancestor, is not assimilationism but includes inconsistency. Then, Ifa's thought became radical in modern Japan.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：沖縄　帝国主義　植民地主義　日琉同祖論　包摂／排除　ナショナリズム

１．研究開始当初の背景

伊波にかんする研究には膨大な蓄積がある。とくに沖縄の日本への「復帰」前後からはじまる伊波研究の増大は著しく、金城正篤・高良倉吉『伊波普猷』(1972 年)、外間守善編『伊波普猷　人と思想』(1976 年)、比屋根照夫『近代日本と伊波普猷』(1981 年)などの重要な先行研究がある。しかし、伊波の思想をトータルに論じようとしたものは比屋根の他には鹿野政直『沖縄の淵』(1993 年)などに限られ、また、伊波が生涯にわたって唱え続けた「日琉同祖論」についても、言及されることはしばしばあるのだが、それを主たる考察対象としたものは意外と少ない。日琉同祖論は日本への同化の理論と捉えられるか、あるいは同化と自立の間を揺れ動く思想と捉えられるにとどまっているのが現状である。反復帰論を唱えた思想家として重視すべき新川明も、伊波の日琉同祖論については同化の理論であると断じている(『反国家の兇区』など)。また、最近の研究でも福間良明『辺境に映る日本』(2003 年)などは、粗い考察しか行っておらず、新たな視点を提供するには至っていなかった。

そうしたなかで、「日琉同祖論」にかんしてまとまった研究として注目すべきは、鹿野の他に小熊英二『日本人の境界』(1998 年)が挙げられよう。しかし、既存の解釈の批判を意図する小熊であっても、伊波が同化と自立の間を揺れ最終的には沖縄ナショナリズムへ至ると結論づけている。つまり、小熊も含め、これまでの研究では「日本」と「沖縄」の二項対立的な解釈から抜け出しきれていない。別の言い方をすれば、伊波を読むとき、そこにはあらかじめナショナルな単位が用意されて、その枠組のなかに伊波を押し込めてしまっているのである。伊波の思想を同化主義と捉える立場には、あきらかに日本というナショナルな単位が先に読み込まれている。また、伊波が同化と自立の間を揺れ動くと捉える立場も、同様に日本というナショナルな単位に対抗する沖縄というナショナルなそれを読み込んでいるといえよう。また、こうしてあらかじめナショナルな単位が用意されてしまうため、日琉同祖論が伊波の思想的変遷のなかで変化している点を見落としてしまっている。たとえば、伊波に醸成されていく「南島」意識と日琉同祖論との関係などはこれまでほとんど無視されてきたのである。日琉同祖論は一貫した主張であるようにみえながら、実は彼の思想的変化を受けながらときに微妙に、ときに大きく変化している。しばしばそれは無視されて、伊波の日琉同祖論といえば同化の思想であると断じられるか、せいぜい同化と自立の間を揺れ動く思想と考えられるにとどまったのである。

２．研究の目的

本研究では伊波を沖縄学の祖として手放しで賞賛したり、同化主義として切り捨てたりするのではなく、同化と自立の間を揺れる人物という既存の解釈をも超えて、伊波の思想を近代日本のナショナリズムを攪乱する思想として捉えなおしたい。さまざまな研究を行った伊波にあって、それらを通底する日琉同祖論という思想を軸としながら、これまでにない新たな解釈を試みるのである。

こうした着想に至ったひとつのきっかけは、2006 年度若手研究（B)において、近代日本に包摂されながら排除される沖縄を、柳田國男と伊波普猷との思想連鎖という観点から思想史的にあきらかにする試みを行ったことにある。そこでは、柳田の一国民俗学が伊波の思想を飲み込みつつ、沖縄学を成立させていく思想連鎖をあきらかにした。沖縄はときに日本の古い姿が残るものとして日本に包摂され異質な存在として排除されるという歴史を思想的に検討していった。この研究では、柳田という巨人の影響を伊波にみていくというところを重視し、沖縄が日本というナショナルな単位に包摂されながら排除されるという点をあきらかにしたが、いっぽうで、伊波には決してこうした観点からだけでは捉えきれない、思想の奥行きがあることを痛感した。つまり、ナショナルな単位自体を伊波が揺さぶり続けているという感触を得た。そこでこの研究をふまえつつも、伊波の「日琉同祖論」を軸に、彼の思想の最深部へと迫り、その可能性を救いだそうと考えたのである。

伊波の先人である太田朝敷は、「嘘することまで他府県の通りにする」(「女子教育と沖縄県」)という同化主義を唱えた。その流れからみれば、伊波の日琉同祖論は日本への同化という文脈に沿った主張とみえてくるだろう。また、伊波のつくりあげた沖縄学という線からみれば、その主張は同化一辺倒ではなく、沖縄の自立を唱えるものと映り、伊波はまさに沖縄という地に生を受けたがために、同化と自立という二項対立の間を揺れ動くと結論づけることになろう。伊波の代表作である『古琉球』にもこうした解釈がなされることがしばしばである。しかし、すでに指摘したとおり、ここで気をつけなければならないのは、「同化」によせ「自立」にせよ、そこにはひとつのナショナルな単位が先に読み込まれているということである。「同化」は日本(＝ヤマト)というナショナルな単位への同化であり、「自立」は沖縄という単位をつくり出す沖縄ナショナリズムに結びつく。私はここに、これまでの伊波研究の隘路をみる。本研究では、むしろ、伊波はこうしたナショナルな単位、それに基づくナショナリズムを根底から覆す可能性を秘めた思想家と捉えたい。

すでに 1900 年という最初期の段階から唱えられた日琉同祖論は、琉球という「異族」(新川明)の存在は確保しながら、それでいてヤマトと同祖であるという矛盾する構造をもった。それは伊波の思想が同化や自立とい

う類型に区分されることを拒否しているということを意味する。そしてこのことは、ナショナリズムを攪乱せずにはいない。すなわち、日本には「同祖」である「異族」が存在することを表明したのが日琉同祖論であるなら、近代日本のナショナリズムの「一枚岩」を要求する言説に、内側からくさびを打ち込み、攪乱させ、その言説を割り崩してしまう可能性をはらんでいる。また同時に、それは「同祖」が軸となっている以上、沖縄をことさら独自なものとして特別視し沖縄ナショナリズムを立ち上げることも拒否する。伊波の思想を同化と自立の間を揺れるものという先入観から読み込むことをやめると、日本と沖縄という思考自体に伊波が疑義をさしはさんでいることがみえてくるのである。

こうして動き始めた伊波の思索は、1921 年の柳田国男との出会い以降、だんだんとヤマトに引き寄せられていくようにみえる。すなわち、1920 年代以降、伊波は沖縄を「南島」と捉えるようになり、鹿野もいうように日本と沖縄の共通性をことさら指摘するようになったようにみえる。さらにいえば、当時すでに植民地帝国となった日本の南進論にさおさす思想であると評価することもできそうである。しかし、ここで、伊波が「南島」を語り始める時期に、一気におもろ研究へと沈潜していったという事実に注意したい。「南島」意識の醸成によってヤマトへ思想の重心を移動させながら同時におもろ研究へ没頭していく伊波は、またしてもナショナルな言説を拒む思索を展開しているといえないだろうか。方言撲滅、標準語強制や国体意識の高揚などが沖縄に求められ、それにあたかも呼応するように伊波はヤマトと沖縄の「同祖」性を強調するが、それでいて「異族」であることを示すおもろ研究を展開した。沖縄をナショナルな統合の論理によって包摂していく力を逆手にとり、ヤマトとの関係を「同祖」という観点から強調してみせながら、おもろ研究を徹底してすすめることで「異族」性を際立たせる。そうした伊波の戦略がここには存在する。「ヤマト」にも「沖縄」にも、両者に向かって牙をむく伊波の思想戦略をここにみることが可能だと思われるのである。

３．研究の方法

伊波の日琉同祖論という思想の形成、発展、変化を精緻に追う作業を行う。研究進行の便宜のために、彼が活動をはじめる 1900 年から、離郷し東京に移り住む 1925 年までと、その後 1947 年に没するまでの２期に区分して考察を行う。

伊波研究に必要不可欠の『伊波普猷全集』は、編集当時可能な限りの網羅性を追求したものであるが、収録された著作や論文はほとんどが最後の版のみであり、幾度となく論考に手を加える性癖のあった伊波の思想形成の経過を読み取るには残念ながら十分とはいえない。彼の多くの論考は『琉球新報』などの新聞や『沖縄教育』といった雑誌に発表され、さらにそれに手を加えて著作のかたちにされていった。また、版を重ねるにあたって加筆修正を行い、論文を入れ替えるといった作業もしている。戦火で焼失したものや入手不可能のものも存在するが、できる限りすべての版にあたり、伊波の思想形成や変化の過程もあきらかにしていく。

たとえば、『古琉球』という著作はそもそも新聞、雑誌掲載論文などを集めた論文集として 1911 年に現れた。その際にも伊波による修筆が認められるし、これは 1916 年再版、1922 年三版、1942 年再版と修筆や論文、口絵の入れ替えが行われていった。修筆にとどまらず、論文を入れ替えるという作業をしていることは、この著作への並々ならぬこだわりを示すとともに、『古琉球』全体の意味を伊波がときに微妙に、ときに大胆に変更していたということを意味する。また、『古琉球』での議論をベースとした著作は『古琉球の政治』(1922 年初版)をはじめ多数存在する。『古琉球』各版の異同についてはもちろん、『古琉球』と各著作および『古琉球』の改訂と各著作の関係も精査し、日琉同祖論のあり方をみきわめたい。さらに、そうした伊波の思想が当時の思想的文脈から見たとき、どのように見えるのかについても論じたい。大正デモクラシーといった近代日本の思想的文脈をふまえるのはもちろん、伊波の論考が掲載された『琉球新報』や『沖縄教育』といった雑誌で、伊波以外の論者たちが何をどう論じていたのかを考察していきたい。

1925 年から 1947 年までの第 2 期には、伊波は東京に移り、生活環境、学問環境も大きく変わった。『琉球古今記』『孤島苦の琉球史』(いずれも 1926 年)、『沖縄よ何処へ』(1928 年)という代表作に始まるこの時期は、伊波がヤマトと沖縄の関係を強調する論調へと変化しているようにみえる。「孤島苦」という柳田から得た概念を駆使して、故郷沖縄を想う意識はありながら、「沖縄」ではなくヤマトからみた「南島」という言葉を多用しはじめるのは鹿野政直の指摘するとおりである。しかし、いっぽうで伊波はこれまでにましておもろ研究に没頭していく。この伊波の意識と研究内容を精緻に追い、日琉同祖論がどういう色彩を持つのかをあきらかにしていく。

以上をふまえて、最終的に伊波の思想をトータルに論じる。日琉同祖論を軸としながら、新たな伊波普猷像を提示し、そこから広くナショナリズムの問題にまで射程を伸ばして研究をまとめたい。

４．研究成果

伊波の『古琉球』所収論文「琉球史の趨勢」およびその原論文である「郷土史についての卑見」を主たる対象とし、原論文に存在した「現代史」というべき部分が削除さたことを手がかりとしつつ、伊波の日琉同祖論がいか

なる意味をもつのかをさぐった。それをまとめたものが「伊波普猷と同化の暴力」である。ここでは、伊波の唱えた日琉同祖論はいわゆる同化の理論ではなく、ヤマトからの包摂と排除の圧力、同化の暴力への危ういながらぎりぎりの抵抗であったことをあきらかにした。

本研究遂行中の 2011 年 3 月 11 日に、東日本大震災という未曾有の大災害が起こった。本研究はもちろん本研究としてすすめつつ、この大災害にあわせて立ち上がるナショナリズムは、まさに伊波の思想によりながら検討し、「攪乱」しなければならないという現代的要請から発表したものが、「東日本大震災、原発震災そして「オキナワ」――震災後 2 ヶ月の言説状況にかんする覚書」である。伊波の思想をふまえつつ、震災後の言説が、ナショナルな枠組を立ち上げていき、そこに大きな排除の力がはたらくことを被災地と沖縄とから考察した。

さらに、ヤマトからの包摂と排除の圧力、同化の暴力への危ういながらぎりぎりの抵抗を示した伊波の思想は、2013 年末の沖縄県知事による普天間飛行場の辺野古「移設」容認という事態を受けても検討すべき課題であるとして発表したものが「普天間飛行場問題から「負担」と「平等」を考える」である。伊波は沖縄の「奴隷根性」を深く憂慮した。しかし、現在、普天間飛行場の「移設」をめぐって沖縄はその奴隷根性を脱し、米軍基地を「平等」に「負担」するということに根底的な問題を発している。そもそも基地「負担」は命の危険を求めるものであり、そこに「平等」という概念を導入すること人権という観点から考えても矛盾があることを指摘した。

以上のように既発表論文については、本研究本体の成果と本研究を現代と関わらせたものとの両方が存在している。はからずも歴史的な事件と呼びうるものが続いたため,こうした発表になったが、本研究そのもの成果について近々、論文として発表予定である.特に、女性(史)についての観点からの論文をまずは発表し、その後、随時伊波の「南島」意識などについて研究成果を公表していくつもりである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

(1) 三笘利幸「普天間飛行場問題から「負担」と「平等」を考える」九州国際大学『教養研究』第 20 巻第 2･3 号合併号,査読無,2014 年,21-45

(2)三笘利幸「東日本大震災、原発震災そして「オキナワ」――震災後 2 ヶ月の言説状況にかんする覚書」九州国際大学『教養研究』第 18 巻第 1 号,査読無,2011 年,71-106

(3) 三笘利幸「伊波普猷と「同化」の暴力」九州国際大学『教養研究』第 17 巻第 1･2 号,査読無,2010 年,129-147

６．研究組織

(1)研究代表者

三笘　利幸（MITOMA TOSHIYUKI）
九州国際大学・経済学部、准教授
研究者番号：60412615